

「引っ越し」

野瀬 隆平

数えてみると、生まれてこの方十七回も引っ越しをしている。他の人達がどの位しているか知らないが、多い方に入っているであろう。

理由の一つは、サラリーマン時代に国内での転勤は無なかったものの、イタリア、ロンドンそしてシンガポールと海外への転勤があったことだ。

さて、何度も引っ越しをしていると、その都度家財を整理、処分することになるが、その最たるものは「本」であろう。

現在、自分の書斎にある本は小さな書棚に収まる程度である。最近、読書会で読む本や、新聞の書評欄を見て読みたいと思う本も、出来る限り図書館で借りるようにしており、本数はほとんど増えることはない。手元に本が無いのは寂しいが、行き先短い身としてはなるべく物を増やさないようにと心がけている。

何度も引っ越しをしたことのもう一つの影響は、自分には「ここが懐かしい故郷」と想うところがないことかも知れない。産まれ育った所に長年住んでいれば、歳をとっても懐かしく想う「故郷」となるだろうが、何度も引っ越しをしていると、そのような所がないことになる。

強いて云えば、最も多感な時期である中学生の頃から大学を出るまで住んでいた「東京」を故郷のように感じている。東京だけでも、四軒の家に移り住んだが、それぞれに懐かしい思い出がある。

現在、船橋に住んでいるが、旅先でどこから来たのかと問われると、つい東京からと云ってしまう。船橋に住みながら帰属意識は「東京」ということなのだろう。

故郷を懐かしむ友人の話を聴いていて、羨ましく思うこともある。しかし、そのような場所がないことは、逆に住む場所に拘りがなく、新しい地に抵抗なく移り住むことが出来て、新たな経験を積めると云う利点もある、と勝手に思っている。

さて、生きている間にもうこれ以上引っ越しすることはないだろうが、あるとすれば夫婦ともども介護付きの施設に移り住むことか……。もっともあまり望んではないことではあるが。